

他者の変化が個人に及ぼす影響について

—自尊心とソーシャルスキルに着目して

○高橋知里¹・中島健一郎²

(¹広島大学教育学部, ²広島大学大学院教育学研究科)

問題

現在、教育現場では心理教育が行われている。具体的にはソーシャルスキルトレーニングや自尊教育が挙げられる。しかし、その効果については一貫した結果が得られていない(佐藤, 2018)。牧野(2011)では、中学生を対象としてコミュニケーション教育を行い、自己評価に与える影響を検討した結果、肯定的感情では上昇した者、低下した者、変化した者がおり、全体としては変化が見られなかった。この結果について、社会的比較の観点から考えると、上昇した他者の変化と比較することで、肯定的感情が低下した可能性が考えられる。

そこで、本研究では、周囲の人の自尊心(以下、SE)またはソーシャルスキル(以下、SS)が変化することが、個人のSE(またはSS)に影響するかを明らかにすること、また、影響する場合、どのような人の変化がどのような影響を与えるのかを明らかにすることを目的とする。

方法

参加者および手続き 女子短期大学の学生186名が調査に参加した(平均年齢は19.4歳)。場面想定法を用いた質問紙調査を2週にわたって実施した。

質問紙 1週目の調査では、場面想定を行う前のSSを測定するために、成人用ソーシャルスキル自己評価尺度(相川・藤田, 2005)を用いた。36項目6件法であった。次に、特性自尊心を測定する尺度として、自尊感情尺度(山本・松井・山成, 1982)を用いた。10項目5件法で回答を求めた。また、SSとSEの重要度を各2項目7件法で回答を求めた。

続いて、2週目の質問紙では、参加者を友人向上条件、クラスメイト向上条件、変化なし条件の3つの条件に無作為に配置し、各条件のシナリオを呈示した。その後、シナリオ内の友人もしくはクラスメイトに対する態度の測定のため、態度尺度(磯部, 2005)を用いた。4つの下位尺度、計14項目からなり、5件法で回答を求めた。次に、場面想定後のSSを測定するために、成人用ソーシャルスキル自己評価尺度(相川・藤田, 2005)を用いた。36項目6件法であった。

条件操作 シナリオの内容によって、条件操作を行った。SEとSSそれぞれについて、友人向上条件、クラスメイト向上条件、変化なし条件を設けた。

結果

分析は、場面想定シナリオの内容によってSEとSSに分けて階層的重回帰分析を行った。SEについては、目的変数を態度尺度の下位因子(拒否、励み・誇り、親密さ、劣等感)の得点とし、Step1に、特性自尊心、SEの重要度、水準(場面をダミーコード化したもの)を投入し、Step2に2要因交互作用、Step3に3要因交互作用を投入した。SSでは、目的変数を場面想定後のSS得点とし、Step1に場面想定前のSS得点、SSの重要度、水準(場面をダミーコード化したもの)を投入し、Step2で2要因交互作用、Step3に3要因交互作用を投入した。

SEについて、態度尺度の「励み・誇り」において、Step3のR²の増分が有意であった($\Delta R^2 = .082, p = .017$)。特性自尊心とSEの重要度とクラスメイト向上条件における交互作用($\beta = .418, p = .004$)が認められた。単純傾斜の検定の結果、クラスメイト向上条件でのSEの重要度高群において特性自尊心の単純主効果が有意であった($\beta = .853, p = .016$)。SEの重要度が高い場合、クラスメイト向上条件において特性自尊心が高いほど、シナリオ内のクラスメイトに対する励み・誇りが高かった。

SSについて、場面想定後のSSにおいて、Step3のR²の増分が有意傾向であった($\Delta R^2 = .011, p = .075$)。場面想定前のSSとSSの重要度と友人向上条件における交互作用($\beta = .137, p = .026$)が認められた。単純主効果の検定の結果、友人向上条件において、場面想定前のSS低群においてSSの重要度の単純主効果が有意傾向であった($\beta = .126, p = .088$)。特性的なSSが低い場合、友人向上条件においてSSの重要度が高いほど、自分のSSが下がったと感じる。

考察

他者のSEやSSが変化することが個人に影響を及ぼす可能性が示唆された。したがって集団で心理教育の効果が一貫していなかった原因として、他者の変化が個人に及ぼす影響は様々であったことが考えられる。